

東日本大震災における計画的避難区域への帰還とそれに伴う生活の変化について ～福島県飯舘村における2事例の調査より～

キーワード：東日本大震災，計画的避難区域
福島原発事故，復興，飯舘村

石井研究室 杉岡 陸

1. 研究の背景

2011年3月の東日本大震災によって、福島県飯舘村は震度6弱の揺れに襲われた。他の地域に比べて、地震・津波による被害はわずかなものであった。しかし、東京電力・福島第一原発事故の影響により、飯舘村は高濃度の放射能に汚染されたことから、2011年5月に村全域が計画的避難区域に指定された。その後(2012年6月)、指定は「避難指示解除準備区域」・「居住制限区域」・「帰還困難区域」の3つの区分に再編された。住民の避難生活は現在も続いているが、政府は2017年3月に帰宅困難区域を除く2つの区域の避難指示を解除した。

2. 調査の目的

本研究では、「計画的避難区域」へ指定された飯舘村の住民の帰還後の生活の実態を明らかにすることを目的としている。震災前と後での生活や環境の変化を事例からとらえ、また、帰還はできても村の生活機能が十分戻らない現在、また多くの住民が未だ帰還していない現状において、どのような生活を送っているのか、またどのような心理の中で生活しているのかを明らかにすることによって、今後の村の在り方を考え、原発事故がもたらしたことを事実としてとらえていくことを目指す。

3. 調査の方法

今回の研究では、震災前に福島県飯舘村に居住していた居住者で、避難指示解除に伴い村に帰還した2組(3人)の事例を対象として、生活の実態、震災前後での生活の変化についてインタビュー調査により明らかにする手法を採った。2018年10月、12月、2019年1月に各一日、それぞれに60～120分間のインタビューを行った。また、飯舘村の現状を統計資料から明らかにした。

4. 飯舘村の概要

4-1. 震災前の福島県飯舘村

福島県飯舘村は、阿武隈山系北部の高原に開けた豊かな自然に恵まれた村である。おもな産業は農業で、特に、飯舘牛という黒毛和牛の飼育が盛んだった。震災前(2011年)の人口(住民登録数)は約6,500人だった。

4-2. 東日本大震災後の福島県飯舘村

飯舘村は、震度6弱の揺れに襲われたが、その被害はわずかなものであった。しかし東京電力・福島第一原発の事故の影響により、飯舘村は高濃度の放射能に汚染され、村全域が計画的避難区域に指定された。主な産業であった農業は、田んぼや畑など放射能汚染の影響により、

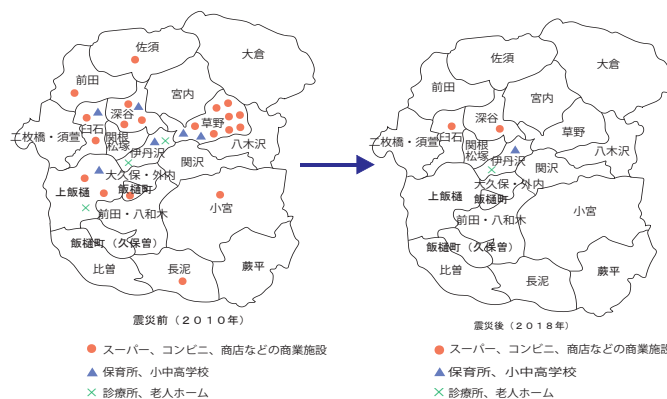


図1：福島県飯舘村内の各生活施設の変化

営むことができなくなった。村民が避難したことにより村はゴーストタウンになった。

4-3. 避難解除後の福島県飯舘村

2017年3月に避難が解除され、村の機能(役場)が戻り、一部住民が帰還している。しかし、その数は統計からは把握できない。住民登録上は5,700人である。震災前にあった65の小売店・飲食店は3か所に、3か所ずつあった小学校や保育所は各1か所となった。コンビニは1軒から2軒に、1軒あったスーパーは撤退した(図1)。

5. 調査対象者の概要

5-1. 調査対象者Aさん

1938年(昭和13年)生まれの80歳女性(震災時は73歳)。飯舘村での居住歴は約40年にある。昔は息子夫婦と子供たちの6人で暮らしていたが、現在は一人暮らしをしている。震災後から血圧を抑える薬を飲んでい。何の影響か下痢も続いていたが、現在は症状が軽くなったそうである。加齢に伴う物忘れも多くなってきている。震災前は、朝の新聞配達に加え、日中は工場で働いていた。2003年の定年後も、定年した人たちを対象とした派遣会社で働いており、仕事を生きがい、やりがいにしていた。相馬市の仮設住宅へ避難した際も、相馬市内の診療所で、清掃や植栽の仕事に従事していた。

5-2. 調査対象者Bさん

1941年(昭和16年)生まれ77歳女性(震災時70歳)、1940年(昭和15年)生まれ78歳男性(震災時71歳)の夫婦。生まれて以来ずっと飯舘村に住んでいた。震災時は7人で暮らしていたが、震災の影響で現在は夫婦で二人暮らしをしている。2人とも血圧を抑える薬を飲んでい。体調は良好だと言う。震災前は農業を営んでおり、野菜を飯舘村の学校給食や、直売所へ納めていた。

時刻	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
震災前	起床	新聞配達							仕事						夕食	入浴等		就寝	
避難中		起床				仕事		帰宅	昼食		ボーっとしている				寝たり起きたりを繰り返す				
帰還後		起床				仕事		帰宅	昼食		庭の手入れ				夕食	入浴	TV鑑賞		就寝

調査対象者Aさんの一日の過ごし方で、大きく変化しているのは、仕事をしている時間が減り、何もしていないという時間ができたことである。避難中に何もせずボーっとしている時間が出来てしまい、生活リズムが狂い、寝たり起きたりする生活になってしまった。帰還してから寝たり起きたりの生活は無くなったが、仕事以外の外出がほとんど無くなり、毎日家にいることが多くなった。そのためテレビ鑑賞をするか、庭を猿や猪などの野生動物に庭を荒らされるの阻止するために庭の手入れを行っているようだ。

図2 調査対象者Aさんの一日の過ごし方（震災前後）

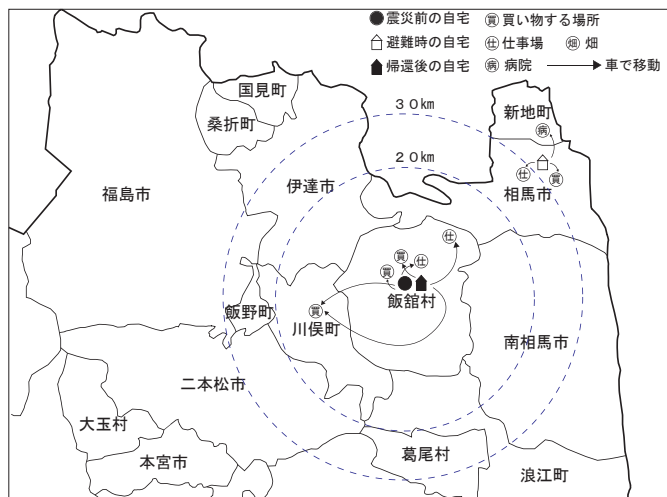


図4 調査対象者Aさんの避難経歴と行動範囲

しかし、畑を放射能に汚染され、避難を余儀なくすることになった。その後、避難時にやりがいを見つけるために農業の代わりに、新しく仕事を始めた。人がいなくなった飯館村のパトロール（見守り隊）である。避難場所から片道約40kmの距離を毎日通勤続けた。

6. ヒアリングの結果

先述したように福島県飯館村は、帰還できるようになったものの村内の生活施設の復旧はめどが立たず、買い物などの用事を済ませるのにも大変な状況がある。客観的に見ると、生活も落ち着いていた避難先から、故郷とは言え、さまざまな不自由があると思われる飯館村になぜあらためて帰還することを選んだのか。

6-1. 調査対象者Aさん

調査対象者Aさんは、元の住宅は汚染がひどく同敷地に建て替えて帰還した。「買い物は川俣町まで行かないとろくにできない」、「郵便局もやっておらず川俣町へ行く」、「移動には車を使用するが、煽られるため運転が怖い」と言っており、不自由を痛感していた。それでも飯館村で住むことを選んだ理由は、「自分は村の住人である」、「長年住んで思い出のある土地だから」とのことだった。仕方なく村に帰還しているのではなく、不自由を承知の上で、自らの強い意志、覚悟を持って生活している。

6-2. 調査対象者Bさん

時刻	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
震災前	起床		畑仕事				野菜の選別		昼食		子供の送迎		畑仕事			夕食	入浴		就寝
避難中		起床	飯館村へ行く				仕事					帰宅する				夕食	入浴等		就寝
帰還後			起床	朝食			仕事		昼食		畑(趣味)					夕食	入浴等		就寝

調査対象者Bさんの一日の過ごし方で、大きく変化しているのは、やりがいとしていた農業ができなくなったことで、農業ではない仕事を新たに始めたことである。避難中は農業の代わりに、飯館村内のパトロールを仕事として行っていた。帰還後は新しく飯館村内で清掃の仕事をしている。震災前のように畑仕事がしたくて、飯館村内に新しく小さな畑を造り作業をしている。この畑は、仕事ではなく趣味の範囲だが、やりがいを持って行っているようだ。畑仕事をする事で、震災前の生活に近づけようとしている。

図3 調査対象者Bさんの一日の過ごし方（震災前後）



図5 調査対象者Bさんの避難経歴と行動範囲

調査対象者Bさんは、「震災の影響で農業ができなくなり、とてもやるせない」と涙ながらに語った。それでも飯館村に帰還することを選んだのは、「自分が生まれ育った場所である」、「村の住人でいたいから」と言っていた。帰還後は災害公営住宅に居住しているが、新しく畑を造り、趣味の範囲で農業を始め、新しく生き甲斐となるものを見つけたと語った。インタビューの最後には、「この震災を辛いと思ったことはなく、仕事や農業を誇りに一日一日を過ごしている」と言っていた。

7. まとめ

今回はわずか2事例の状況しか調査できなかったが、そこにある現実を見ることができた。現在の飯館村は、居住するにはあまりにも条件が悪い。そのような中で帰還することを決断して居住している人は、「飯館村」（故郷）に強い愛着を持ち、覚悟を持って生活している。今回の事例以外の帰還者の多くが高齢者であると思われる。10年、数十年先、飯館村は存続しているのだろうか。復興しないから人が帰ってこないのか、人が帰ってこないから復興しないのか、難しい問題だが、少なくとも避難指示が解除され、居住が許される状況にある現在、そこで暮らす人たちの生活を支えていくことは不可欠なことであり、現在の課題をとらえ見つめながら、飯館村の在り方を考えていく必要があるだろう。